昭和60年(1985年)11月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
11　NOVEMBER, 1985　毎月10日発行　第67号

# 教皇様の声

# 地に屈するが、永遠に生きる

## 死はキリストにおいて私たちを神のもとにつれもどす

「地とそこにあるもの、世とそこに住む者、すべて主のもの。」(詩篇24(23)・1)

宇宙は主のもの。主は全てのものの創造主。その宇宙のなかに私たちの地球があり、その上に人間を神の似姿とし、男と女につくりだされた。

創造主はおおせになった。「地に満ちて、地を支配せよ。」(創世の書1・28)

人間は歴史の歩みを進めるうちに、地に満ちて地を支配した。

にもかかわらず人間は同時に地に屈服する。死において地に屈するのである。世界中のどの墓地を訪れてもこの点を証明している。土から出た人間は土にかえる。(創世の書3・19参照)

本日、そして特に明日、教会は、地上に生きる人間に共通の運命である死の神秘を、黙想する。

### 永遠の疑問

地は主のものです。「地とそこにあるものはすべて主のもの。」神の似姿として造られた人間は決定的に地に属するのでしょうか。ただ地にのみ属するのでしょうか。人間の運命は地上だけのものだろうか。人間がちりに戻ったとき必然的に全ては終わりを迎えるのでしょうか。本日私たちが集う墓地で、世界中の墓地で、この永遠の疑問が湧いてきます。この地が神のものであるなら、神の似姿として造られた者は当然のこと神に属するのではないでしょうか。

### 神の子

典礼によると、使徒聖ヨハネは第一の書簡で次のように書いています。「考えよ、神の子と称されるほど、御父から計りがたい愛を受けたことを。私たちは神の子である。この世が私たちを認めないのは御父を認めないからである。」(ヨハネ①3・1)

人は真に神の子となりました。託身(受肉)されたみことば、永遠の御独り子において、人は養子となったのです。人間の死にあたり、地上は人間を土にかえすことによって、決定的に人間性を取り去ってしまう。しかしその同じ人間は、キリストの恩寵の状態で死を迎えるなら、自らのうちに不滅の現実、神的生命を秘めているのです。

このローマの墓地、そして世界中の墓地はこの秘義を髣髴させます。時間のうちに人間、つまり私たちの一人となった永遠の御独り子における子、神の子らよ、ごらんなさい。神の御独り子は聖霊の御力によって処女マリアから生まれ、十字架上で死去し、死者のなかから復活された。

全ての墓地はキリストの十字架と復活に与っています。

地は神の御子の秘義の訪れを受けました。地は贖いの秘義の訪れを受けました。死は、私たちから人間性を取り去って、そこから「地の土」を作るのではない。死は、イエズス・キリストにおいて私たちを神のもとに連れ戻してくれるものです。

### 私たちは彼のようになるだろう

「私たちは神の子である。後にどうなるかはまだ示されていないが、それが示されるとき、私たちは神に似たものになることを知っている。私たちは神をそのまま見るだろうから。」(ヨハネ①3・2)

私たちは神の啓示の計画のうちに住んでいます。神は、御独り子において私たちに話しかけられた。御子を通して神は、私たちのうちに新しい生命である神との父子関係の秘義を実現なさるのです。

死によって私たち一人ひとりの生命は最終的に終わりを告げます。そのとき、この世界から受ける知識は全て終わる。

聖書の啓示はまだ続きます。「後にどうなるかはまだ示されていないが……」と。

死と共に、人間にとって永遠という次元が現実になります。神の似姿としての人間は自らの「原型」に出会うのです。「神をそのままに見るであろうから。」

このように私たちは、ここローマの、そして世界中の墓地を人間の死の場と見なします。

「人間は一度だけ死ぬ。」(ヘブライ9・27)

と同時に、ここは、人間が主のみ前によみがえる場でもあります。正義と慈悲が語る場、審判の場なのです。

「だれが主の山に登れよう。だれがその聖所に立てよう。それは手の清く、心の純な者、……彼は主の祝福を受け、その救いの神から報いを受ける。」(詩篇24(23)・3～5)

「人間は一度だけ死んでその後審判を受けると定められている。」(ヘブライ9・27)

### み顔をみたてまつる

本日は教会全体がとくに死去した人々のためにささげられた日ですが、まだこの世で旅を続ける私たちは、すでにこの世を去った人人、ここと世界中の墓地にいこう人々と一つになりたいと思います。

「それは主を求める人々、み顔をしたう人人、ああ、ヤコブの神よ。」(詩篇24(23)・6)

願わくは、彼らがみ顔をみたてまつらんことを。

「神をそのままみたてまつらん。」

神の似姿のなかに啓示されている事柄が彼らにおいて完成しますように。

以上が諸聖人の祝日の祈りです。これが死者の記念日の私たちの祈りです。取り次ぎを願う祈りであり、賞賛の祈りです。

主は祝せられますように。全地とその中にあるものは御身のものですから。

主は祝せられますように。人はこの地に属するものではなく、この地上に従属するものではありませんから。人は御身において永遠でありますから。

(十一・一)

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1985 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

# 神の道にもどりたい

## ―待降節のねがい―

「主は我らの父、あがない主、それこそ永遠からの主のみ名である。主よ、なぜ私たちを道に迷わせ、主を恐れないほど、心を固くされるのですか。」(イザヤの書63・16～17)

我らの父であり、あがない主。待降節の核心に神の秘義が刻み込まれてあります。つまり、神は私たちの主であり贖い主であると。

人は神の道から離れたことを知った上で神に向かいます。なぜ、私たちを道に迷わせられるのかと。

待降節は、これらの道に戻りたいとの願いをあらわしています。人間が自ら捨て、今なお以前にもまして捨てつつある道に戻れと。

そこで預言者は叫ぶ。「しもべの愛のために、主の遺産である種族への愛のために、み心を教えたまえ。」(イザヤの書63・17)

心の叫びがいかに真実、心底からのものであるか、おわかりでしょう。神がはじめから人間のために示してくださった道に人間が戻れるよう、神が人に近づいてくださらねばならない。

しかし実を言えば、神が御自ら私たちに近づいてくださる必要はない。神は全く自由な御方であるから。そして、預言者はこの点をよくわきまえています。預言者がこんなに強く主に呼びかけるのは、神の契約、つまり慈しみ深い愛を知っているからに外なりません。

人間と、そして人類の現状はまことに重大な分裂をきたしている。

イザヤの叫びはそのまま私たちの待降節の叫びではないでしょうか。(…)

次のイザヤの言葉はなお一層痛烈です。「主は、み顔を隠し、罪におちる私たちを見過ごされた。」(イザヤの書64・6)

これほど重大なことはありません。人間は自らの罪に翻弄(ほんろう)されている。自らに、つまり、自らの弱さにひたりつつ、自らの高慢に身をまかせてしまっている。

以上は、創世の書と聖パウロの書簡にある元々の罪、原罪のときから重大な事柄でした。

そして、現代においてもまことに由々しい事実です。現代は、罪を罪と呼ばずに、私たちに愛をそそぐ神のみ前で、罪を見つけられないようにとねがう。罪に身をゆだねた人間とは、痛悔も回心もしない人のことです。罪にとどまり、聖霊にそむく人間のことなのです。

イザヤ預言者のことばは私たちのまことに由々しい状態です。しかし、こういう恐ろしい状態を使って、預言者は叫びをつづけます。

「主は我らの父、あがない主」であると。

(十二・二)

## 主の愛は打ち負かせない

「主の道をととのえよ…。」　旧約の福音史家とも称すべきイザヤ預言者はこのように言っています。同じ言葉は、キリストの降臨を間近かに迎えようとするヨルダン地方にも響きわたりました。ザカリアとエリザベトとの子ヨハネが、聴衆に悔い改めの洗礼を受けよと呼びかけるとき、繰り返した言葉であったのです。

「ヨハネの話を聞いた人々は、税吏までも洗礼を受け、神は正しかったと認めたが、ファリサイ人と律法学士たちはその洗礼を受けず、自分たちに対する神の御計らいを空しくした。」(ルカ7・29～30)

人間が神の御計らいを空しくすることができるのだろうか。(…)　この点をよく考えれば、贖いと待降節の秘義をより一層深く理解することができるでしょう。

聖ルカ福音史家の言葉はすこぶる正確です。神の人がヨルダンの川辺で教えている。その人は預言者、というより預言者以上の人。自分の言葉で、神から来る真理を伝えるだけでなく、他の誰よりも救いに関わる出来事を告げ知らせてくれる。ヨハネは救い主との出会いに導いてくれる。預言者であるのみならず、使者の働きをする。それゆえ、教えを説くだけでなく、回心のしるしで言葉を結ぶ、つまり洗礼を授けるのです。悔い改めの洗礼を受けた聴衆が主の降臨に与る、これがヨハネの狙いです。人々の心を待降節と贖いのためにととのえようとしているのです。

洗礼を受ける人は預言者の言葉に耳を傾け、「神は正しかった」と認めます。ヨハネの言葉が伝える真理を神から来たものであると認めて歓迎するのです。洗礼を受けない人は真理を認めない、つまり「神は正しかった」という点を認めません。こうして彼らは、「自分たちに対する神の御計らいを空しくする」のです。

### 神の御計らいを空しくする

人間は神の御計らいを空しくできるのだろうか。人は自分たちに対する神の御計らいを空しくできるのでしょうか。この問いに対する答はすでに聖書の冒頭、つまり創世の書の最初の数章に現われています。

そうです。人祖は自分たちに対する、そして間接的に全人類に対する神の御計らいを空しくしました。罪なき原始義の状態（元々義にかなった罪なき状態）が原罪に破れてしまったのです。

創造主のおことばに逆らって人祖は「神が正しい」ことを認めず、神のみ旨に逆らって自分たちと子孫に対する神のご計画を空しくしてしまいました。

創世の書の最初の部分は以上のことを教えてくれますが、それらは同時に、もう一つの真理、すなわち、神のご計画を空しくする人間の行為は結局成功しないとも教えています。創造主との最初の契約を破る原罪は、贖い主についての預言を含んでいるのです。イエズス・キリストにおける神と人間との新しい永遠の契約についての預言を秘めています。

原罪と同時に人類の歴史に待降節が始まり、贖いの秘義が人の心のなかで動き始めたわけです。(…)

贖いとは人間の罪を遙かにしのぐ強い愛のしるしです。そのような愛は、個人、国々、人類全体の罪や不忠実によって決して打ち負かされることはありません。

ヨハネ・パウロ二世
教皇様の声
年間購読者募集中
（1月～12月）

日曜日ごとの「お告げの祈り」の時や水曜日ごとの一般謁見の時を始め教皇さまは、あらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙は、ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのままわかり易い日本語に訳して伝える月刊紙です。

年間購読申込要領

■教会でまとめて、お申込みの場合
教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料になります。年間購読料は800円です。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申込ください。

■個人で直接お申込みの場合
1,300円（年間購読料800円＋送料500円）を郵便振替にてお送り下さい。

見本紙は40円切手同封の上、ご請求ください。

財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 ☎0797-31-3452

愛が愛であることをやめることはない。人間の罪の歴史のなかで、最終的な勝利をもたらすのはこの愛です。

「山が動き、丘はうつっても、私の愛は変わらず、平和の誓いは動かない。」(イザヤ54・10)(…)

### 道をととのえよ

待降節とは何かという問いに対する答えは、結局のところ、私たち一人ひとりに戻ってきます。

私たちは、ヨルダンの川辺でヨハネの言葉に耳を傾ける聴衆と同じ状態にいます。「道をととのえよ」と呼びかける預言者の言葉は全ての人々のためですが、私たち一人ひとりに語りかける言葉でもあります。悔い改めの洗礼を受けるか、神の御計らいを空しくするか、それを決めるのは私たち一人ひとりなのです。(…)これは同時に罪についての真理を受け入れることです。神のみ前で罪を告白する、教会の秘跡のなかで罪を告白しなければなりません。

今日、以前にもまして、罪の社会的な面に注目すべきことはたしかですが、それが自罪、つまり私たち一人ひとりの個人的な罪、そしてその罪に対する私たち一人ひとりの責任を軽くみたり、ぼやけさせたりするようなことがあればまことに危険なことであると言わねばなりません。

(一九八四・十二・十五　学生たちへ)

# 祈ろう

## 私たちの弱さが神の御力にであうよう

イエズス・キリストのお話になった天国のたとえを考えてみましょう。「天の国は人が畑にまいた一粒の芥子(からし)だねのようである。それはどの種よりも小さいが、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来てその枝に宿るほどの木にさえもなる。……天の国はパン種のようである。女がそれを取って三斗の粉の中に入れると、全部がふくらむ。」(マテオ13・31～35)

天国はまた、よい種がまかれたのに、敵が来て毒麦の種をまいた畑にもたとえられています。畑の持ち主は、両方とも収穫のときまで育てておけと命じました。(マテオ13・24～30参照)

教会は、この教えを思いだして、天の国に私たちの場を見つけうるように、また私たち一人ひとりのなかで天の国が成長するように、と要求しています。

それゆえ教会は祈れと教えます。

事実、私たちのなかで天の国が成長するにはまず祈りが必要です。祈りの中でこそ、私たちの弱さは神の御力に出会うことができますから。

「霊も私たちを弱さから助ける。私たちは何をどういうふうに祈ってよいかを知らぬが、霊は筆舌に尽くしがたいうめきをもって、私たちのために取り次いでくださる。そして心を探るお方は霊の意向を知りたもう。すなわち、霊は神のみ旨に従って聖徒のために取り次がれる。」(ローマ8・26～27)　聖パウロはローマ人へこのように書き送っています。

ところで、人間のうち、それどころか聖人たちのうちでも、聖母マリアほど強烈に霊における祈りを続けた人はいません。

『お告げの祈り』を唱えるときは、聖マリアと心を一つにして祈りましょう。

罪なき神殿、いとも聖なるマリア様の取り次ぎによって、聖霊が私たちの祈りを支えてくださり、その結果、天の国が私たち、ひいては全ての被造物に届きますように。

(アンジェルス・メッセージ)

# 平和への挑戦

## 善を選ぶ力をとりもどそう！

広島、長崎を語ることは、人間がたがいに与えうる途方もない苦痛や恐怖、死を生ま生ましく思い浮かべることです。と同時に、そのような悲劇的運命が不可避でないという事実を悟ることでもあります。そのような悲劇は避けることができるし、また避けなければなりません。私たちの世界は悪を排して善を選ぶ力量があるという自信を回復しなければならないのです。

カトリック教会は、戦争と死に対抗して、民族、国家の間にほんとうの平和を推し進める仕事に挑戦し、あとに引くつもりはありません。教会はこの挑戦を、生命の主なる神における義務、地球上の子供を含めすべての人ひとりひとりに対する愛の不変の奉仕、であると考えています。

私はこの機会を利用して、熟慮に熟慮を重ねるべき事柄を繰り返し申し上げたい。大多数の人々は平和を求めていると。ところが、「現代社会は、いわば緊張の網に閉じこめられている。……現存する緊張を前にして感じる人類の無力を見ると、様々な障害と共に希望が、(現代の生活や国際関係が基(もと)となる)組織よりも、もっと深いところにその端緒を有することがわかります。戦争の源が人間の心にあるというのが、私だけでなく、大勢の善意の人々の確信であります。殺人を犯すのは、剣ではない、あるいは今日ならミサイルでもない。殺人を犯すのは人間なのです。」(一九八四年一月一日、世界平和のメッセージ)

従って、変えるべきは人間の心です。心から、平和が生まれるのです。

この点で、一九四五年八月六日以後の広島と、九日以後の長崎は、世界に対してかけがえのない責任を負っています。この二つの町の人々は、自ら体験した者のもちうる力を発揮して、死に対する生、戦争に対する平和の尊さを訴えることができるのです。

広島は、起こりうることの、しかし起こる必要がないばかりか決して起こってはならないことの、生き証人です。一九八一年に広島を訪問した私が力説したかったのは、「戦争することは不可避の定めでも、不可抗力でもないことを再三再四確認すべきである」という点でした。

もちろん、スローガンを繰り返しさえすれば平和は確立されるかのように考えて、こういうことを口にするだけでは不十分です。どうしても必要なこと、それは、真剣で包括的な平和教育であり、世界にはびこる不平等と不正義に身をもって対処することです。個人、グループ、国が誠実に正直にこの道を自発的に歩むならば、ヒロシマが繰り返されることはないでしょう。

四〇年前の痛ましい体験は、現在と将来の紛争の公正かつ平和的な解決として、世界が納得する新しい方針の原点とならなければなりません。この平和教育において広島が有する特別な役割は、過去の恐怖から、新しい見通し、新たな希望が生まれることを教えることです。

神の御助けを願えば、四〇年前の広島の体験が無駄になることはありません。私は日々創造主である神に、私たちが平和と兄弟的一致の効果的な道具になるようお教えくださいと祈っています。

(一九八四・八・六)

# 不変の教え

## 信仰の人マリア

1　待降節とクリスマスのお祝いの間、私たちはキリストのことはもちろん、処女マリアについても十分黙想します。クリスマスの秘義に近づき、マリアと一緒におられるキリスト、「子供とその母」(マテオ2・11、13)とを見つけるのです。

御子を礼拝しながら、その御母を敬い尊び、マリアが最初に祝福された方であること、そして何よりもその信仰(ルカ1・45、11・28)のすばらしさを宣言します。

2　信じるとは、決して易しいことではありません。マリアにとっても、確かに易しくはなかったでしょう。それはマリアの信仰の素晴らしさゆえに、繰り返し賛美の言葉がマリアに向けられていることを思えばよくわかります。こうした賛美の言葉は、信仰の価値を強調し、マリアの信仰がいかに難しいことであったかをきわ立たせてくれますから。次の福音史家の言葉はこの点をはっきり表わしています。「だが、彼らにはイエズスの言われたことがわからなかった」(ルカ2・5)と。ルカは信じることの難しさを恐れずに記しました。御子のお言葉、その秘義が、マリアとヨセフにさえ理解できなかったと記しています。

マリアの、ヨセフの、そして大勢の弟子たちの「理解できないこと」というのが、イエズスを信じない人々の不信仰と大違いであることは誰がみても明らかです。私がここで言う難しさとは、根本まで洞察すること、直ちにキリストという人物とその秘義のもつ深遠さを測り知ることの難しさを指しています。ところで、「理解できなかった」のはほんの一瞬のことで、マリアは沈思黙考し、賢明な心構えをもち、イエズスの御母にみるあの典型的な態度で、それらのできごとやお言葉を心にとどめて考えつづけられました。(ルカ2・19、51参照)

3　実に、信仰は光である。しかし、秘義を徹底的にわからせてくれるものではありません。むしろ反対に、神とそのお言葉に信頼することであって、人間の理性の範囲を超越するものです。信仰とは神により頼むこと、このような態度で、自己の堅固さと確心に基づいて神を探し求め見出すことなのです。これがマリアの内的な性質で、一度だけお告げの時に表われています。すなわち、「私は主のはしためです。あなたのお言葉のとおりになりますように」。なんとすばらしい信仰。マリアの信仰は、語り継がれ祝福された信仰、見ないで信じた人々の信仰です。(ヨハネ20・29参照)

マリアは生涯を通して、私たちと同じく、日に日に信仰と洞察力に進歩して行きました。公会議は次のように述べています。「このようにして、祝福された乙女は、信仰という巡礼の路を進んで行き、聖子との一致を十字架にいたるまで忠実に耐えしのばれた。」(『教会憲章』58)

信仰の人マリアが、神の神秘の道を行く私たちにつき添ってくださいますように！

(一九八四・一・二十二)

## 二つの指環
### 母の知恵

ジュセッペ・サルト(聖ピオ十世)は、主のお望みのままに自らを捧げることを、自分の家族から学びました。家族について語るときはいつもヴェネツィア訛で話していたように、貧しいが神に全幅の信頼をおいている家族でした。

主任司祭がジョヴァンニ・バティスタ・サルトに、息子ジュセッペが初聖体のあとで司祭になりたいと打ち明けたことを、ジュセッペの秀でた才能を指摘しながら伝えたとき、父ジョヴァンニは家の手伝いをさせるつもりであったにもかかわらず、答えました。「神がこの子をお望みなら、そうしましょう。この子は神のものですから」と。

これが信仰です。ジュセッペは神のもの、生まれ出て、名指しで神に召される子供たちすべてと同じく、主に属する子であったのです。ピオ十世教皇は、この話をいつまでも憶えていました。そして、自らを神のもの、神の愛にすべてをささげたものと考えていたのです。

みなさんはジュセッペの母に関するすばらしい話をご存じです。ジュセッペは、リェゼの母を訪れ、枢機卿の指環を見せながら言いました。「お母さん、きれいだろう。」すると母上の方は、自らの結婚指環を見せながらすばやく答えたのです。「そうね。だけど、これがなかったら……！」信仰篤く、キリスト教的教育を授ける家族でなかったとしたら、神のみ旨を受け入れることを目撃できる家族でなかったとすれば、教会(小教区)で教えられた教えに忠実な家庭でなかったとすれば、将来の教皇の司祭としての姿ははっきりとはしなかったことでしょう。神の人、疲れを知らず、根気づよく、教会に仕える偉大な人格を見ることはできなかったことでしょう。

(一九八五・六・十五、リェゼにて)

## 黙想のしおり ⑨

### 夫婦

夫婦は初めから家庭がもつ根本的な価値について同じ考えをもっているか、あるいは途中からでも、同じ見解を分かちあうよう努めるべきだ。

◈

人間の身体的な面がその美しさ、輝き、真実を描きだすのは、つまるところ「霊」の働きである。

◈

ザカリア家の戸口で、エリザベトは聖マリアに叫んだ。「しあわせなこと！　信じたあなたは。」(ルカ1・45参照)　母性を称えよう。母性こそ人間に対する信仰のあらわれであるから。(…)　親が子に生命を与えるということは、すでに人間に対する信頼の行為である。母親はその子を自分の胎内に孕み、出産の苦痛をすべて受け入れる覚悟でいる。そうすることによって、母親は女性として母性としての全存在をかけて人間に対する信頼を宣言しているのである。「母としての価値を証言し、同時にそれをこえて、「自分とともにいる」孕んだばかりの全く未知の価値をも証言する。

◈

夫婦愛が人間にふさわしい愛であるためには、身体的と精神的、霊的面を備えた、人格を包み込んでいなければならない。

◈

祈りは夫婦の愛と一致の本質をなす。

### 家庭

社会がこれ以上没個性的になり規格されること、つまり非人間的で不人情のかたまりになるのを望まないのなら、家庭を強めなければならない。家庭を愛しなさい。家庭を尊びなさい。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円
■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393